創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫（報告４－1）
科目「子どもと環境」における「気づき」の学習

Learning “careful observation” in “Children and Their Environment” course
An Approach to Encourage Creativity for the Students of Early Childhood Education（Report 4－1）

吉　田　若　葉*

Abstract

This report analyses how students learnt "careful observation" in "Children and Their Environment" course. The result of this analysis shows that the students, who started learning early childhood education for the first time, learnt two kinds of “careful observation”: one is through experiences at classroom practices, and the other is through knowledge they acquired from lectures. It is important for the students who wish to become creative teachers to awake their “careful observation” and cultivate it while their study and beyond. Then the students should assess the environment from children’s perspective and learn how to devise and develop their teaching method accordingly.

キーワード：子どもの目線／知識と体験／意識化

1. はじめに

幼稚園教育要領・保育所保育指針には、保育内容として「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の５領域が、幼児の発達の側面から示されている。子どもの発達は、体験する様々な活動を通し、各領域の影響を受けながら総合的に遂げられていく。したがって保育者は、子どもの発達を総合的に把握しながら、様々な問題に対応していかなければならない。つまり、保育者には、優れた問題解決の能力が求められているのである。

上記から、保育者養成課程では、問題解決能力の育成が必須となる。問題解決能力に優れていることは、創造的なものの捉え方ができるということでもある。[1)]『幼稚園教育要領』第１章総則にも、「（前略）教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」[2)] と記してある。学生たちが創造性豊かな保育者として成長するよう、養成課程での学びが期待される。本稿は、「創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫」の第４稿として、北陸学院大学人間総合学部幼児児童教育学科１年次履修科目「子どもと環境」での試みを報告するものである。

2. 科目「子どもと環境」

科目「子どもと環境」（1年次通年）は、保育内容の領域「環境」について学ぶ科目である。2コマ90分の演習科目で、履修者71名をA・Bに分けて行っている。

領域「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心と探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」[3)] と示されている。授業では、子どもたちがかかわっている環境と、そこで展開される具体的な活動を総合的に考えていく。特に、子どもの目線に立って子どもと共感できる保育者を目指し、学生自身が周囲の環境を身近に感じ､学びを実感できるよう工夫している。

さらに、テキストからも幼児の保育環境を感じ取れるよう、事例と写真（フルカラー）が豊富に

＊ Wakaba YOSHIDA
北陸学院大学　人間総合学部　幼児児童教育学科
子どもと環境　講師

掲載されている『事例で学ぶ保育内容　領域環境』（萌文書林）[4] を使用している。シラバスは、テキストに基づいて組み立て、①子どもと環境とのかかわりや子どもの育ちの理解、②保育の環境の具体的なデザインの方法、③保育者の柔軟で適切な援助のあり方、の３点について学んでいくことを示している。[5]

上記３点の学習効果を高めるため、授業では、講義に加え具体的な実践事例の活動を行っていく。①子どもと環境とのかかわりや子どもの育ちの理解に関しては、「幼稚園で遊ぶ体験」「記録写真・竹の生長とともに」「しゃがんでみつけた！・みあげてごらん」「遊びを伝える」、②保育の環境の具体的なデザインの方法については、「幼稚園で遊ぶ体験」「どのお顔？」「絵本を見る」「記録写真」「サウンドスケッチ」「身近な材料の工夫」「遊びを伝える」、③保育者の柔軟で適切な援助のあり方に関しては、「幼稚園で遊ぶ体験」「どのお顔？」「記録写真」「遊びを伝える」等の活動で学ぶ。これらの活動の詳細については後述する。

また、環境に関するキーワードとして、「出会う」「感じる」「気づく」「発見する」「好奇心をもつ」「探究する」「表現する」をあげている。これらは、子どもと環境のかかわりをとらえる視点としてテキストに示されているものである。[6]

報告者は、「創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫」を研究テーマとして以来（1999 年～）学生の活動記録に「自分自身への気づき」の項目を設けてきた。[7] 学生が授業で学んだことを振り返ることで、自分の気持や認識の変化を意識していくことが、創造的な保育者としての成長に重要であると考えてきたからである。そこで、環境のキーワードの一つ「気づく」に焦点をあて、『科目「子どもと環境」における「気づき」の学習』を本稿のテーマとした。本稿１で述べたように、幼児期の活動は総合的なものである。したがって、「子どもと環境」で学ぶ視点は、保育全般に有効であると考えている。

3.「気づく」とは

前述の環境に関するキーワード「気づく」という言葉は、広辞苑[8] によれば、「①ふと、思いがそこにいたる。気がつく。感づく。②意識をとりもどす。正気にもどる。」の解釈があり、本稿で扱う「気づく」の意味は、①の解釈にあたる。しかし、「ふと、思いがそこにいたる。気がつく。感づく。」だけでは、「気づく」という行為自体が曖昧で漠然としている。

そこで、「気づく」という行為をもう少し明らかにするために、「気づく」の類語を調べてみた。[9]

「気付く」何かの拍子にそのことを知る。「思い及ぶ」その物事に関連するある事柄に気づく。「思い当たる」いろいろ考えてみて、なるほどと気づく。「思い至る」いろいろ考えた末に、あることに気づく。「感付く」表面に現れていない事柄に気づく。「感じる」その場の雰囲気などから、ある気持ちをいだく。「感じ取る」様子などからはっきり気づく。「悟る」物事の道理や変化などに、はっきりと気づく。「直感」思考･推理などによらず、直接感覚的に感じ取ること。「直観」思考･推理などによらず、物事の本質を瞬時に感じ取ること。「浮かぶ」考えやイメージがはっきりとした形をとって（頭の中に）現れる。「思い付く」ふとある考えが浮かぶ。「考え付く」新しい考えがうかぶ。「発想」あることを思いつくこと。「閃く」瞬間的にぱっとよい考えが頭に浮かぶ。「ぴんと来る」相手の言葉･態度などによって直感的にひらめく。「勘」感覚的にひらめく力。

以上、類語を幾つか挙げてみたが、「気づき」にも様々な気づき方があることが分かる。「気づく」行為の幅は広い。

「気づく」ということと関連して、リーダーシップ研究者であるコヴィーは、「私たちには選択の自由がある」[10] という理念を唱えている。この理念は、状況にかかわらずすべての人にとって最も実用的で、適切で、タイムリーな理念であるとして、選択する能力に関して、

> 「みずから人生の舵取りができるというのは、人間の本質だ。人間は進んで行動するが、動物や人間型ロボットは反応するだけである。人間はそれぞれの価値観に基づいて選択をすることができる。私たちは選択によって自分の人生を方向づけることができるのであり、この能力によって自分自身を作り直し、未来を変え、この世のあらゆるものに大きな影響を与えることができる。選択をする能力は人間に与えられた最大の天賦の才だ。私た

ちはそのおかげでその他の天性を活用することができる。選択をする能力によってこそ、私たちは人生をより高いレベルへと引き上げることができるのである。（中略）私たちは、自分自身の選択によって自分自身を決めるのである。」[11]

と述べ、この選択の自由は、人が刺激を受けて反応する間の、わずかなスペースの中にあり、そのスペースは、人それぞれの状況により大きさ（器）がちがうと主張している。そして、英国の精神医学者ロナルド・デイビッド・レインの言葉「私たちの思考や行為は、私たちが気づいていることではなく、気づかずにいることによって制約されている。そして私たちは気づかずにいるというそのことに気づかずにいる。このため状況を変えることはむずかしい。私たちが気づかずにいることこそ私たちの思考や行為を決定するものだというこの事実に気づかない限りは。」[12] を紹介している。そして、「刺激と反応の間には選択をするための一定の余地があることに気づかずにいると、みずからを変革する能力が失われる。自己を見つめることができるのは人間だけである。」[13] と述べている。

つまり、刺激に対して反応を選び取ることが「気づく」行為であるといえる。そして、人は気づいたことで、そのことを意識し、新たな行為へと発展させていくことができる。「気づく」ことは、創造的な行為となりうる要因のひとつである。

4. 保育者と「気づき」

よく「あの人は気がきいてよく動く。」「気がきかなくて、ぼんやりしている。」などと人物評価をすることがある。「気づき」は、人柄や職業人としての資質評価にも影響するもののようである。

森は（2007）、保育者に求められる心と技として「気づき（ふりかえり）（姿勢・態度）」と「学び（知識）」と「情報（子どもの文化）の活用（技術）」をあげている。「子ども理解、保育内容、保育室の環境、保護者とのかかわり等保育全般にわたり、「今までしていたから」と慣例にながされたり、「こうあるべき」と決め付けたりするのではなく、「なぜあの時、私の予測と子どもの表現にズレが生じたのだろう」とふりかえったり、「私は何をねらいとして、この活動を展開していきたいと考えているのだろう」と自問する姿勢が大切である。」[14] と述べている。「気づき」は保育者にとって重要な資質であり、保育全般に影響を及ぼすものである。

そこで、保育者の「気づき」の重要性についてさらに具体的に学ぶため、保育関係の文献を渉猟し、「気づき」「気づく」の文字が記述してある箇所を調べ抜粋した。

(1) 文献からの抜粋

① 物思いに沈んで自分の問題にとりつかれて歩いているときには、空を流れる雲、輝く青空に気がつかない。一息入れて空を仰いでみれば、空は高く無限にひろがっていることに気がつき、自分がなんとちいさなことにとらわれていたかを思い知らされる。[15]（津守 2006）

② 言語指導やその環境はもっと広い観点から捉えるべきである。たとえば保育の場にたつ保育者の位置取り、園の物理的な環境づくりといった、ことばの教育には関係がなさそうにみえる要因が、じつは子どものことばを育てるもう一つの言語環境として非常に重要な意味をもってくるように思われる。そのような気づきこそ、子どもにとってことばを育てる保育環境を準備し、より豊かにことばを育てる保育者の実践を可能にしていくのではなかろうか。[16]（岩田 2005）

③ ある子どもの行為を継続して見ると、その子どもの行為の仕方の特色に気づかされる。[17]（津守 2006）

④ 同じ場所にとどまることの中に、呼吸のリズム、身体の動き、それに伴う心の微妙な揺れ動きがあることに気づくと、そこは単調な時間ではなくなる。（中略）「気がつくということがだいじですね」と、十年近くもこの子のそばを離れたことがない母親が語った。[18]（津守 2006）

⑤「子どもの内なる課題に気がつき、それにこたえて行為（保育）するとき、大人と子どもとの関係は創造的に変容しはじめる」・・・理解するとは、自分自身が変化することであって、相手を自分の期待に沿うように、あるいは知識の網の目にいれるように変化させることではない。[19]（津守 2006）

⑥ 応答するというのは、子どもの行動に対してではない。心に対してである。手をつないできた

指先に子どもの能動性を察知する。「保育室から庭に出たところに私が立っていたとき、ふと気がつくと、後ろから一人の子どもが私の手にさわっていた。・・・私がそれに気がついて驚いたのは、その行為の中に子どもの心の思いがこめられているのを見たからであった。」[20]（津守 2006）

⑦　気になる子どもの姿をきちんとまとめてみるだけで、その子のどこがどう気になっているのか、自分の気づき方が自分で見えてきます。（中略）こういう報告を出し合って、ああでもない、こうでもないと議論しあうのです。そういうくり返しの中で、子どもを見る目が必ず耕され深くなっていきます。[21]（汐見 1998）

⑧　教師には、自分の保育を省察することから、つぎの保育を構想していく力を身につけていく必要がある。（中略）他の教師と話し合い、子どもの見方や保育の考え方を交流させる中で、自分一人では気づかなかったことに気づかされることも多い。[22]（神長 2007）

⑨　保育者としての変化は、保育者自身の認知的傾向に気づく機会やそのような経験によって引きおこされるようだ。（中略）ある経験のなかで、自分の幼児のみかたやとらえかたに気づき、そのような認知的傾向をうみだしている自分自身の枠組みを自ら変えていこうとするようだ。[23]（高濱 2001）

⑩　保育の実践に慣れてくると、いつのまにか、気を抜いて保育の場に出ている自分自身に気づかされることがある。子どもとの交わりが浅くなっている。それではいけないと思い返して、謙虚な気持ちになって保育に向かう。そして保育の実践の原点を思い起こす。子どもとかかわっている「いま」を深められるように、自分の意識を変える。[24]（津守 2006）

以上、「気づき」や「気づく」の文字が記述されている箇所を文献より抜粋してきたが、さらに、「気づく」に類すると思われる記述もあげてみたい。

⑪　このように話し合われる内容が「どうかかわるべきか」から「何が起きているか」へと変わっていくことで、具体的な子どもの姿や状況に自然と目が向くようになり、その具体的な出来事をもとに自分たちの子どもに対する援助のあり方や同僚に対しての自分の存在を問い直す姿がみられるようになってきた。[25]（三谷 2007）

⑫　保育者が子どもに共感しようと試みるとき、子どもだけをみつめているのでは、それは、いっこうに、かなわないのです。まず、子どもを見て、それから、子どもの視線の行く先を追い、そこを、「共に」見ることがとても重要になります。そうすることで「子ども」と「子どもの注目対象」と「子どもの周囲の状況」の三者が目に入り、それらを統括してとらえることが可能となります。そこで、はじめて、子どもがおこなおうとしていることを理解できるようになり、子どもに共感することが可能となるのです。[26]（宇田川 2007）

⑬　また、子どもの発達課題を念頭におきながら、その子のその子らしさを発見しのばしていくことによっていつの間にかその発達課題をその子なりの形でクリアーしているように働きかけていくと言ってよいでしょう。その働きかけ方の勘どころをつかむこと＝子ども理解なのです。[27]（汐見 1998）

⑭　予期せずに子どもと出会うことになった「いま」にあえてとどまって子どもとかかわるとき、思わぬ発見をする。（中略）一人の子どもとかかわる「いま」は、全体の状況の中で保育者が選びとるものである。[28]（津守 2006）

⑮　かかわる子どもの立場にたち、一緒に考え、喜びや楽しみを分かち合い、時には悩みながらも解決方法や新たな発見を味わう姿勢が必要不可欠なのです。そうした姿勢がともなって初めて保育者としての本当の「技」や「腕」、すなわち専門性と呼べるのではないでしょうか。[29]（三谷 2007）

⑯　要するに、保育者の感性、子どもの遊びへの見通し、がなければ、機会をつかんで発展させることができない。本来、子どもは好きな遊びの中が、ほとんど総合活動になっている。[30]（本吉圓子 2003）

⑰　保育者が育ち、その専門性を高めていくということは、当然のことながら、自分の保育している子どもたちのことがよりよく「見えてくる」ということです。「見えてくる」のは、子どものかかわっている世界であり、さらにはその創造に関与している自分自身の保育者としての姿です。[31]（三谷 2007）

(2) 考察

(1) では、関連諸文献のなかから、保育者の「気づき」に関する記述を17箇所抜粋した。抜粋した内容を要約してみると、「気づく」保育者になるには、ゆとりをもって、子どもとともに在ることを自覚し、保育の原点を見失わずに子どもとかかわること。そして、子どもの姿や状況に自然と目が向くように心がけ、子どもの姿に共感し、広い観点から子どもの環境を豊かに捉えるようにすること。子どもの行為を継続して見ることと、子どもの「いま」にとどまる視点をもつことで、子どものその子らしさを発見し、子どもの心に応答して、子どもの内なる課題に気づいていくこと。そして、子どもの姿をきちんとまとめて記録していく。そうすることで、自分自身の子どもの見方や捉え方を意識できるようになってくる。また、他の仲間と保育について話し合うことで、問題の解決方法や子どもの遊びへの見通しももてるようになる。そうした姿勢がともなって、保育者としての創造性や専門性が高まってくるのである。以上の要約より、保育者の「気づき」の重要性に改めて気づかされる。

保育者が保育者として習熟していくには、当然、経験の積み重ねが必要となる。高濱（2001）は、保育者の問題解決能力は、経験とパラレルな関係にあるとしながらも、学生や初心者でも乳幼児と接する機会が多ければ、想到の知識をもつ可能性があるとの考えを示している。[32] そして、

> 「知識の構造化は、経験の蓄積だけでは進行しない。豊富な知識を相互に結び付けて多面的に考慮すること、多くの知識の中から適切だと考えられる対応策を選び出すこと、ある目標をめざすには何から手をうてばよいかを予測することなどを可能にするダイナミックな機構を想定する必要がある。この機構はおそらく、対応がうまく進行しているときよりは、困難だと認識される時に活性化されやすいのではないだろうか。そこで重要になるのは、保育者の経験する内容と経験のしかたであろう。」[33]

と述べている。ここでは、保育者養成課程にある学生に、何を学ばせるべきかについての示唆が与えられている。学生にとっては、幼稚園教諭や保育士資格取得に必要な基本的な知識と技能を、どのように学ぶかが重要なのである。学生にとって知識や技能は、授業だけでなく、実習やボランティアなどの体験によっても蓄積される。そして、得た知識を総合して結び付け、子どもの育ちを多面的に捉えて考えていく力が必要となる。得た知識の中から適切な対応策を選び出す力や、先を見通す力、つまり問題解決能力が問われてくるのである。養成課程では、あらゆる機会を用いて学生の問題解決能力を育て保育の現場へと送り出さなければならない。幅広い知識と体験の蓄積が大きな課題である。

さらに高濱（2001）は、養成課程にある学生に対しては、自分自身の保育観や発達観に気づき、それを意識化していけるような機会の提供が必要である[34]（高濱 2001）と述べ、「気づき」を意識化していくことを強調している。はたして、「子どもと環境」の授業が、「気づき」を意識化する良き機会となっているのだろうか。学生の記述から調査し考察していくこととする。

5. 学生の「気づき」に関する調査方法

学生の「気づき」の実態を把握するために、二つの方法で調査を行った。①学生全体への調査、②学生３名の活動記録を時系列で追った調査、である。

学生全体への調査は、「子どもと環境」の前期授業最終日の試験の中で行った。独自のアンケートとしなかったのは、同授業に対する素直な学生の考えを知りたかったからである。回答の結果は、各学生の記述を要約してまとめ集計した。

学生３名の活動記録を時系列で追った調査は、項目別に個人の「気づき」の経過を追ってみるために行った。本報告書記載の記述は、授業後に提出した活動記録等の抜粋である。

調査対象は、幼児児童教育学科１年「子どもと環境」履修の学生71名である。

調査期間は、2008年度通年とする。ただし今回は、前期分の中間報告とし、後期の学習へと繋げていきたいと考えている。

調査項目およびこれに関する報告と考察は、6.以下に詳述する。

6. 学生の記述

(1) 調査項目と学生の記述

【保育者の立場として気づいたこと】（9項目）

前期「子どもと環境」の授業最終日に試験を行い、試験問題4問中の4問目に「授業で実践した活動を思い起こし、保育者の立場として気づいたことを箇条書きで記述せよ」を出題した。回答する項目は実践した8活動と、授業全体についての項目の9項目とした。保育者の立場として、と記したのは、学生に対する意識付けである。点数配分は、的外れな記述でなければ1回答1点とし、9項全体で30点配分とした。採点の結果、最高点は32点で30点以上が3名いたが、概ね適切な配分だったと思う。最低点は3点、平均点は15点であった。前期の活動を思い起こしての記述は、学生の授業態度がはっきりと読み取れた。記述の内容が少なかったり、曖昧な表現であったり、字を埋めるために書いたような的外れな文章の場合は、欠席や授業態度に問題があったものと思われる。日頃から授業態度の熱心な学生の記述は、箇条書きの数も多くその内容も詳細な記述が多かった。その中でも、記述表現の簡潔さや的確さで、活動内容への理解度を読み取ることができた。試験では、過ぎた体験を書いているので、学生の記憶にしっかり残り認識されたことのみを記述していると考えられる。

学生が、授業を受けた時に感じた思いや気づきについては、授業終了後に提出している活動記録を抜粋して、後述する。

まず、【保育者の立場として気づいたこと】の記述の内容を項目別に整理した。記載の文は、それぞれの学生の記述内容を要約してまとめたものである。〈　〉内の数字は、回答数であり、％は全回答数1,191に対する割合である。各記述の後の（　）の数字は人数である。なお、①から⑧項目の活動内容については、次項（2）で述べることとする。

① **幼稚園で遊ぶ体験**（遊びと参観）〈155・13％〉

保育室の環境に関して 48

- ・ 保育室の環境設定は、遊具を少し出しておくなど、子どもが遊びに興味を示して遊びに入れるように構成してある（18）
- ・ 子どもの視線を考慮して環境の配置をしてある（8）
- ・ 保育室の環境設定は、子どもの発達を考慮し年齢によってことなっている（6）
- ・ ままごとコーナーには、携帯電話やパソコンがあり、現代の子どもの生活環境が設定してあった（4）
- ＊ 保育室の環境によって子どもの遊びの展開が大きく変わる（3）
- ・ 翌日も遊びの続きができるように、片付けないでそのまま置くことがある（2）
- ＊ 環境の設定は大切である（3）
- ＊ 子どもが安全に遊べるように、環境を工夫しなければならない（2）
- ・ 棚の上に季節の花を飾るなどの配慮があった（2）

幼稚園とは 16

- ＊ 幼稚園は、子どもたちが集団の人間関係のなかで遊んで、多くのことを学ぶところ（11）
- ・ 幼稚園はいろいろなことにチャレンジできる場所である（4）
- ・ 幼稚園は楽しい場所である（1）

子どもの遊びに関して 41

- ・ 子どもは次々と遊びを発展させていく（8）
- ・ 遊びで子どもの人間関係を知ることができる（7）
- ・ 同じ遊具でも多様な遊び方がある（5）
- ＊ 子どもは遊びで様々な発見や気づきをする（4）
- ＊ 自由に遊べるようにすることで、いつの間にか育つことがたくさんある（4）
- ・ 子どもによって遊び方が違う（3）
- ＊ 子どもの主体的な取り組みが大切（2）
- ・ 遊具を介してコミュニケーションを取れる（1）
- ＊ 遊びで豊かな発想が培われる（1）
- ・ 子どもは遊びに集中する（1）
- ・ 子どもが日頃見聞きしていること（周囲の大人の行動など）が遊びに表現されている（1）
- ・ 2色の小麦粉粘土は、子どもの発想を広げる（1）
- ・ 遊びに加わらず眺めて楽しんでいる子もい

る（1）
・ 活き活きしている子どもの写真に気づいた（1）
・ 遊ぶときは動きやすい服装で（1）

保育者に関して 18
・ 保育者は､子ども全体に目を配っている(7)
・ 保育者は遊びが発展するように援助している（4）
＊ 子どもの発達程度により援助の仕方が違う（2）
＊ 子どもの目線に合わせて話すことが大切（2）
・ 保育者は遊べていない子どもに対して、さりげなく子どもたちの輪の中へ誘う心遣いをしている（1）
・ 保育者は子どもと一緒になって楽しんでいる（1）
・ 子どもを危険から守るのは保育者の役割である（1）

安全に関して 19
・ 安全にたいする配慮の大切さ（6）
・ 小麦粉粘土は、万が一口に入れても安全である（6）
・ 危険な場所や遊びもある（床に落ちた遊具　大きな積み木の角　高い場所に登る）(5)
・ 危機的状況になると周りが見えなくなる（ボールあてでボールをよけているときなど）（1）
・ 安全に対してすばやく対応しなければならない（1）

学生自身の気持ちについて 13
・ 遊具で遊ぶことで子どもの気持になることができた（6）
・ どんな遊びが楽しいかを実感できた（3）
・ 子どものときより遊具など全てが小さく感じた（2）
・ 園児に成り切って遊ぶのは難しい（1）
・ 保育者として、教科書だけの勉強ではだめ（1）

②「どのお顔？」（絵を介して気持を話す）〈86・7.2%〉
・ 表情から相手の気持を読み取れる（16）
・ 目、眉毛、口を変化させるだけで表情が変わる（13）
・ 気持をことばで表現しやすくなる（11）
・ 保育者が子どもの心情を把握することができる（8）
・ 自分の気持を考え気づくことができる（7）
・ 顔の表情で気持を表現できる（7）
・ 簡単に顔の表情を描いて楽しむことができる（6）
・ 様々な感情があることに気づく（5）
・ 思いやりが育つ（3）
・ 線だけで顔の表情を表現できる（2）
・ 気分によって顔の表現が変わる（2）
・ 絵に描いたほうが、伝わる活動もある（2）
・ 互いに気持を聞き合いながらコミュニケーションがとれる（2）
・ 絵の表情で、子どもの興味を引くことができる（1）
・ 顔の表情をまねて遊ぶことができる（1）

③ **絵本を見る**（2人1組で閲覧し感想を話し合う）〈133・11.2%〉
・ 色彩感覚を養うことができる（16）
・ 様々な学びができる（15）
・ 絵本にはいろいろな種類がある（12）
・ 様々な刺激が与えられる（11）
・ 言葉や表現のしかたを学ぶことができる（10）
・ 絵本の楽しさに気づいた（8）
・ 様々な学びができるので、いろいろなジャンルの絵本を読む機会をもつとよい（9）
・ 遊びのヒントを得ることができる（7）
・ さまざまなことを感じとる（5）
・ 見る視点によって感じ方が異なる（4）
・ 感想を伝え合うことで、人間関係が養われる（4）
・ 絵は、子どもの想像力を豊かにする（4）
・ 文字に興味をもつようになる（4）
・ 文字のない絵本もある（4）
・ 文を読まなくても、絵で読むことができる（3）
・ 対象年齢により内容が異なる（4）
・ 感じたことを他の人と共感できる　（3）
・ 自然や動物に関して多くの知識が得られる（2）

・　絵本の登場人物に共感することで様々な感情を体験できる（2）
・　ものの形を意識することができる（2）
・　絵と文との関連が大切（1）
・　絵本の美しさに気づいた（1）
・　子どもの目線で描かれている絵本は楽しい（1）
・　読んでもらって楽しむ本と自分で読んで楽しむ本がある（1）

④ **記録写真「竹の生長とともに」**（5歳児6ヶ月間の記録）〈148・12.4％〉

竹と遊ぶ子どもに関して 113

＊　協同作業を通じて、共有、共感、連帯感が生まれ協調性が養われる（17）
・　子どもは、様々な出会いから遊びを発展させる（14）
・　子どもの主体的な発想が尊重されている（15）
・　満たされたときの子どもたちの表情(笑顔)(9)
・　竹だけで、たくさんの遊びや学びができる(8)
・　竹を通して様々なかかわりをして成長している（7）
・　話し合いにより遊びを発展させている（7）
＊　子どもたちが主体的に協力して試行錯誤する過程が達成感や満足感をもたらす（5）
・　竹とのかかわりで､道具の使い方を学ぶ(5)
＊　子どもの考える力や想像力が育っている(4)
・　子どもは自ら興味をもつと挑戦し熱中する(3)
・　竹とのかかわりが深くなると、認識が深まり表現も深まる（3）
＊　話し合いで自分の気持を言葉で表現できるようになる（3）
・　実際に参加していなくても、見て楽しんでいる子もいる（3）
・　役割分担をして協力することで絆が深まる(2)
・　作業の進め方にも、女の子と男の子の関わり方がある（2）
＊　竹に実際に触れることで長さや高さや竹の性質を実感している（2）
・　子ども同士、刺激しあって遊びに挑戦している（1）
・　絵の具にもいろいろな遊び方がある（1）
・　作品の製作過程を工夫し楽しむことで、作品への愛着が生まれる（1）
・　竹と触れ合うことで、環境の7キーワードの内容を体験している（1）

自然に触れることに関して 20

・　自然に触れることの大切さに気づいた（7）
・　自然に触れることで､観察力が身につく(3)
・　竹の生長を通して、自然の美しさや不思議さを体験できる（4）
・　自然に触れ合う楽しさに気づいた（2）
＊　自然に触れて感受性が豊かになる（2）
＊　自然に触れて行動力が身に付き、創造性も育つ（2）

写真記録に関して 8

・　写真から子どもの心情を読み取ることができる（7）
・　写真は子どもの様子を確認することができる（1）

保育者に関して 7

＊　子どもの主体的な遊びの展開には、保育者の見守る姿勢や助言がおおきな役割を果たす（2）
・　臨機応変な子どもへの対応は難しい（1）
・　子ども一人ひとりへの対応の大切さに気づいた（1）
・　保育者は、子どもの作品がいきるような展示の工夫をしなければならない（2）
＊　保育者も子どもから学ぶ（1）

⑤ **サウンドスケッチ**（音を絵と言葉で表現）〈102・8.6％〉

・　耳を澄ますと、普段気づかない音をきくことができ、周囲のものや状況に気づくことができる（47）
・　鳥の鳴き声にもいろいろな鳴き方が聞こえた（16）
・　人によって聞こえ方や表現がちがう（9）
・　自然や季節を感じた（8）
・　耳を澄ますことで好奇心や集中力が養われる（7）

・ 感受性が養われる（4）
・ 聞いた音を自分の言葉で表現する力が養われる（4）
・ 音を言葉で表現することを学ぶ（3）
・ 音のリズムを発見する（2）
・ 生き物の存在を体感できる（1）
・ 音を言葉で表現することの難しさに気づいた（1）

⑥「しゃがんでみつけた!」「みあげてごらん」（スケッチと気づきのメモ）〈128・10.7%〉
・ 子どもの目線になって、子どもの気づきや発見を感じとることができた（52）
・ スケッチすることで、花や虫などの細かい部分を知ることができた（15）
・ 目線の高さによって見えるものがちがう（9）
・ 子どもの目線で気づいたものを観察していると、好奇心が刺激された（9）
・ 子どもの目線で見上げると木や建物が高くて大きい（8）
・ 様々なものに出会うことができた（6）
・ 見上げると、空、雲 , 木、鳥など世界が広がった（5）
・ 雲を見て想像を楽しめた（5）
・ 季節を感じた（4）
・ 見上げると周りのものに迫力を感じるので、保育者は子どもと同じ目線で話したほうがよい（4）
・ 草や花の生命力を感じた（3）
・ 空の広さや高さを感じた（3）
・ 空の色がよくわかった（1）
・ 新鮮な気持になれた（1）
・ 子どもの目線になることで、日頃気づかない危険を知ることができた（1）
・ 周囲のものに対して敏感になった（1）
・ 小さな生物が一生懸命生きていることに気づく（1）

⑦ 身近な材料の工夫（製作と展示）〈157･13.2%〉
・ 同じ材料でも、工夫次第でいろいろなものを作って楽しめる（ちがう遊びがうまれる）（34）
・ 他の人の作品を見て、参考になった（13）
・ 身近な材料は、子どもの想像力や思考力を働かせ創造力を養う（10）
・ 製作の過程で、はさみや糊など道具の使い方を学ぶ（10）
・ 一つの製作過程を体験することで、さまざまな面の発達をうながすことができる（9）
・ 友だちとアイディアを出し合ったり、道具の貸し借りをすることで人間関係や態度を学ぶ（9）
・ 日常生活には使える材料が沢山ある（9）
・ 製作の過程で改善点や新しいアイディアが生まれてくる（8）
・ 製作のさいには、安全に気を配る（7）
・ 物を大切にするようになる（4）
・ 工夫して表現する力が育つ（4）
・ 周囲の影響を受けて学んでいく（4）
・ 色合いを工夫することは大切だと気付いた（4）
・ 下調べなどの準備の大切さに気づいた（4）
・ 展示の仕方は作品の良し悪しに影響する（4）
・ 5 領域の様々な領域が関連している（4）
・ 興味をもった材料で作ることができる（3）
・ 製作の過程で、材料の手触りや質を認識できる（4）
・ 普段から身近な材料（廃材）を集めておくとよい（3）
・ 作品を完成させた達成感を味わうことができた（2）
・ 5 領域との関連を考えることで新たな工夫を思いついた（2）
・ 保育者が作るものには丁寧さが求められる（2）
・ どのように展開するかを考えることが大切（2）
・ 子どもの年齢にあった材料で作る（1）
・ 繰り返すことは楽しい（1）

⑧ 遊びを伝える（〈遊びのレシピ〉の実践）〈177・14.9%〉
・ 遊び方の説明は、わかりやすく簡潔に話す（33）
・ 伝える難しさを実感した（27）
・ 子どもが遊びを理解したかを確認して進める（14）

・　言葉遣いに気をつける（14）
・　遊びの流れや雰囲気をつかんで、子どもの立場に立って工夫しながら遊びを考える（11）
・　手本を見せると理解しやすい（10）
・　子どもたちがルールを理解して楽しんでいるかを遊びながら確認する（9）
・　子どもの興味関心を引く伝え方をする（8）
・　保育者自身が楽しみ、遊びの楽しさを伝える（6）
・　年齢により遊びの楽しみ方はことなる（6）
・　保育者は子どものモデルとして行動する（6）
・　安全に配慮する（5）
・　保育者自身が遊びを十分理解していなければ伝わらない（5）
・　遊びが、子どもの成長発達にどのようにかかわるのかも考える（5）
・　子どもは遊びながらルールを理解していく（4）
・　遊びはいろいろとアレンジできる（3）
・　保育者が全て指示するのではなく、子どもに考えさせることも大切（3）
＊　保育者は沢山のアイディアを持っていなければならない（3）
・　保育者の言葉かけによって、子どもは遊びに入り込めるようになる（2）
・　他の保育者からも意見をもらうことが大切（1）
・　言葉は正確に理解していなくても、雰囲気で伝わることもある（1）
・　伝えるときの表情も大切である（1）

学生自身について 7

・　トレーニングが必要（3）
・　気づいたことは〈遊びのレシピ〉にメモしておく（2）
・　集団の子ども一人ひとりに目を配るのは大変（2）

⑨ その他授業全体を通して〈105・8.8％〉

保育者に関して 58

・　子どもの視点、目線で考え工夫する（15）
＊　子どもの個性や主体性を尊重し、子どもの意見を大切にする（11）
＊　保育者の感性、視点、態度は、子どもに影響する（7）
・　子ども自身に気づかせ考えさせるように言葉かけをする（5）
＊　保育者は、指示することよりも、遊びを楽しんでいる中で学べるように援助していく（4）
＊　子ども一人ひとりに合わせた対応の大切さ（3）
＊　子どもの気持を受け止めることの大切さ（3）
＊　感覚を研ぎ澄まして保育にのぞむ（2）
＊　保育者は子どものモデルである（1）
＊　集団と個を常に意識する（1）
＊　多様性と繰り返しを重視する（1）
＊　臨機応変な指導の大切さ（1）
・　一人の人間としてその子を理解する（1）
＊　子どもとかかわる中で、保育者自身も学ぶ（1）
＊　子どもと保育者の信頼関係が大切（1）
＊　保育者は、子どもだけでなく、大人とのコミュニケーションも大事　（1）

学生自身について 30

・　〈遊びのレシピ〉を増やすことで自信をつける（8）
・　自分が見えていなかったものに気づくことで、身近な環境について考えることができた（5）
・　子どもの目線を体験することで、幼少の頃に感じていたものに気づくことができた（3）
＊　保育のプロとしての意識をもつ（3）
・　子どもと触れ合う機会を沢山もつ（2）
・　友だちとの話し合いで新しい案が浮かんでくる（2）
・　実践による学びが大きい（1）
・　身のまわりの全てが教材である（1）
・　友だちからの刺激で、自分の努力が足りないことに気づく（1）
・　遊びに入りこめるようになった（1）
・　実践は計画通りにはいかない（1）
・　失敗は成功のもと（1）
・　保育者はやりがいのある仕事である（1）

子どもと遊びに関して 17

＊　子どもは遊びの体験を通して発見し学んでいく（5）

＊　遊びは子どもの生活そのものである（5）

・　年齢や活動の目的に応じて遊びを考えていく（5）

・　子どもについての理解ができてきた（2）

環境に関して 10

＊　子どもを育てるという視点で環境を提供する（4）

＊　ねらいをもって環境をつくる（2）

＊　環境設定は遊びへの興味関心を左右する（1）

＊　環境は子どもの生活に大きく影響する（1）

・　のびのびできる環境を作り出すことが大切（1）

＊　5領域は相互に関連して子どもの成長にかかわっている（1）

(2) 調査項目の活動内容と考察

（1）で述べたように、学生が「気づき」を記述した9項目については、学生自身が、保育者の立場として意識していることである。4（1）の⑨で述べられているように、保育者の「気づき」は、保育者自身の子どもの見方やとらえかたに気づいていく傾向にあるが、今回の調査結果では、学生の「気づき」の傾向として、二つ挙げることができる。一つは、学生が実践活動を体験して感じた実感による「気づき」。そして二つ目は、講義等から学んだ知識、つまり、知らなかったことや曖昧であったことを新たに認識できたという「気づき」である。そこで4(1)の記述で、実感による「気づき」と思われる記述は・で、知識による「気づき」と思われる記述は＊を記してみた。全体の回答数は1,191であった。学生の「気づき」の内、知識と実感との割合は、知識が129、11％、実感が1,062、89％で、実感による「気づき」の割合が9割近くあった。このことは、実践活動の内容によるところが大きいと思われるが、学生にとって、体験を通しての学びは、効果のある学習方法であると考えられる。

各項目の回答数の順位は、多い項目から⑧遊びを伝える〈177・14.9％〉、⑦身近な材料の工夫〈157・13.2％〉、①幼稚園で遊ぶ体験〈155・13％〉、④記録写真「竹の生長とともに」〈148・12.4％〉、③絵本を見る〈133・11.2％〉、⑥「しゃがんでみつけた！」「みあげてごらん」〈128・10.7％〉、⑨その他授業全体を通して〈105・8.8％〉、⑤サウンドスケッチ〈102・8.6％〉、②「どのお顔？」〈86・7.2％〉の順であった。

最も回答数の多い⑧遊びを伝える〈177・14.9％〉と次に多い⑦身近な材料の工夫〈157・13.2％〉は、前期の授業15回中、後半13・14回と10・11・12回での実施であったため、記憶に新しいということもあって、回答数が多かったと考えられる。また、時間の長さも関係しているように思う。体験時間が最も長かった①幼稚園で遊ぶ体験〈155・13％〉と最も短かった②「どのお顔？」〈86・7.2％〉を比較してみると、実施時間の長さが学生の「気づき」に影響すると考えられる。⑧遊びを伝えるは180分、⑦身近な材料の工夫は270分の時間を使っている。授業を2回以上かけて実施する活動では、学生が自分のペースで、自分なりに考えて行動する余裕があるので、学生の「気づき」も多くなると考えられる。

1回の授業で行った活動の中で、④記録写真の回答数が、多かったことを考えると、時間の長さだけではなく、活動に対する学生の関心度も大きな要因になると思われる。

本項では、実践した活動をねらいと内容として概略で示し、考察で（1）で記載した学生の記述について考察を行っていく。

① 幼稚園で遊ぶ体験（遊びと参観）

この活動は、「子どもの生活を身近に感じて、保育の学びを始める」ことをねらいとした1年生のための体験プログラムの一環として位置づけ、大学のキャンパス内にある幼稚園で実施した活動である。

ねらい　i 幼稚園の保育環境を学ぶ。ii 遊具で遊ぶ（休園日の幼稚園で）体験を通して、子どもの気持や保育環境について考える。iii「遊びを楽しむ」ということについて考える。iv園児の様子を参観する。【2回目のみ】

実施時間【1回目】合同5月10日（土：休園日）
9：00～12：30

【2回目】A・B各授業時間（1・2限目）

内容【1回目】ⅰ保育室の環境構成を記録する。ⅱ室内・戸外での遊び。ⅲ片付け・掃除
【2回目】朝の登園から、子どもの遊ぶ様子を観察する。
その他：体験前に、幼稚園や保育所の頃を思い出し、小グループでの話し合いのときをもつ。
考察子どものいない幼稚園で遊ぶ体験と、遊ぶ子どもを観察するという2回の体験プログラムは、これから保育を学ぶ学生に対する動機付けとして有効であったと思われる。

早い時期の体験であったが、155、13％の回答率であった。保育室の環境と子どもの遊びに関しての記述が多く、活動のねらい通りの体験が展開されたと考えられる。ただ、子どもに関しての記述では、観察後に講義等から学んだ知識を加味した記述も多かったと思われる。

②「どのお顔？」（絵を介して気持を話す）
ねらいⅰ簡単に顔の表情を描いて楽しむ。ⅱ今の自分の気持を表現して顔を描き、気持を話す。ⅲ友人の話を聴き気持ちを汲みとる。
内容ⅰ絵本『エンバリーおじさんの絵かきえほん』を参考にしていろいろな顔の絵を書く。ⅱ自分の気持の表情を絵に描くⅲグループの人に自分が描いた絵の表情についてわかりやすく話し、互いに聴き合う。
発展：絵カード（嬉しい顔・困った顔・怒った顔・大笑いの顔）を用いて「どのお顔？」の遊びをする。
考察1,191の回答に対して86と最少の回答数であったのは、講義の合間の短時間の活動だったことが原因だと思われる。楽しく遊び、遊びの展開を考えたり工夫したりする時間をもたなかったので、記憶に残らなかった学生が多かったと考えられる。

③絵本を見る（2人1組で閲覧し感想を話し合う）
ねらいⅰ多様な絵本の表現に触れ、保育環境に対する感性を養う。ⅱ二人一組で閲覧し感想を話し合う。
内容絵本（35冊）について筆者が簡単に解説したプリントを配布後、閲覧する。本は、②ⅰ「どのお顔？」関連の顔や表情に関する本9冊。ⅱ自然の美しさを表現した写真集7冊。ⅲ身のまわりや自然をテーマにした本8冊。ⅳ生活を楽しむ本13冊。ⅴ遊びの参考絵本11冊。
考察この時間は、二人一組で自由に絵本を閲覧し話し合うという活動であった。絵本を楽しみ共感して語り合うことに対する「気づき」(19)より、絵本の魅力への「気づき」（114）が圧倒的に多い。各学生が活動のねらいをしっかりと意識して、配布プリントの解説を読み、話し合いを行うという一連の活動を行っていれば、もっと幅広い「気づき」が書かれたはずである。活動のねらいが徹底されず、絵本を読んで楽しむことが主となっていたようだ。環境について話し合うまでは至らなかったが、感性が養われる点に気づいた学生は多い。

④記録写真「竹の生長とともに」（5歳児6ヶ月間の記録）
ねらいⅰ5歳児の竹と関わる活動の記録写真を通し、様々な体験が総合的に関わる子どもの遊びについて学ぶ。ⅱ子どもから発せられた言葉や子どもの様子を解説し、環境と子どもの育ちについて学ぶ。ⅲ写真から子どもの様子を読み取る。
内容ⅰ5歳児の6ヶ月間の記録写真115枚を、実物投影機を通して見る。ⅱ何枚かの写真は、解説前に子どもの様子を読み取って記録し、その後解説を聞いて読み取りの確認をする。
考察解説を聞きながら記録する活動なので、授業態度と理解度が明確に現れた。数多く記述している学生と記述できていない学生とにはっきりと分かれている。

竹と遊ぶ子どもに対する「気づき」が群を抜いて多かったことから、「総合的な子どもの遊びの理解」というねらいは達成されていたと考えられる。群を抜いて多かったとはいえ、学生一人ひとりの「気づき」としては、まだまだ十分とはいえない。これからも様々な機会を通して、子ども理解を深めていくことは課題となる。

竹と触れ合うことで、環境のキーワードである「出会う」「感じる」「気づく」「発見する」「好奇心をもつ」「探求する」「表現する」を体験している、ことに気づいた学生が1名いた。

⑤サウンドスケッチ（音を絵と言葉で表現）
ねらいⅰ自然を体感しながら音をスケッチす

る。ⅱ音の地図を作る。

内容 ⅰ戸外の（校舎の周囲）音に耳を傾ける。ⅱ指定の用紙（校舎を中央に描いてある）に、聴いた音の発信源の絵や、聴こえた音を言語化して記録する。ⅲ絵を見ながら体験したことをグループで話し合う。

考察 気持ちのよい戸外で静かに耳を澄まして行う活動なので、学生自身に課題意識が無いと、学習効果はなくなる。④記録写真の活動同様、記述している学生と記述していない学生とにはっきりと分かれており、回答数は102で全回答数の8.6％であった。

「耳を澄ますと、普段気づかない音をきくことができ、周囲のものや状況に気づくことができる」と記述した学生は、この活動のねらいを的確に感じ取っているといえる。その数は47名であった。しかし、耳を澄まして様々な音を体感した記憶はあったが、聴いた音を意識して表現するねらいについて記憶していた学生は僅かであった。

⑥「しゃがんでみつけた！」「みあげてごらん」（スケッチと気づきのメモ）

ねらい ⅰ子どもの目線で周囲の自然をよく観察してスケッチする。

内容 ⅰ子どもがしゃがんで見つけるもの、見上げて目に留めるだろうと思うものをスケッチする。ⅱ気づいたことや図鑑等で調べた事柄を絵のまわりにメモする。

考察 この活動は、⑤のサウンドスケッチと併行して行った活動である。回答数（128）から見ると、スケッチすることが目的となっていたので、耳を澄ます活動より記憶していた学生が多い。

ねらいである、子どもの目線で観察するということを的確に捉え、「子どもの気づきや発見を感じることができた」という学生が52名いた。その他にも、子どもの目線に関する記述が多いことから、「子どもの目線」ということについては、ほぼ全員の学生が意識していると考えられる。

⑦ 身近な材料の工夫（製作と展示）

ねらい ⅰ身近にある物や道具にかかわって遊ぶ。ⅱ保育内容５領域との関連を考える。ⅲ友だちの作品から学ぶ。

内容 ⅰ身近にあるものを材料にして、子どもと遊ぶ玩具を考え工夫する。ⅱ製作に必要な道具は自分で用意する。ⅲ製作から遊ぶまでの過程を、各５領域のねらい（心情、意欲、態度）の観点から考えて記述し、子どもの育ちについて考える。ⅳ作品と製作記録用紙を教室に展示する。ⅴ参考になった友人の作品について記録し、人気作品を発表する。

考察 この活動には、十分な時間をかけたので、回答数は、157、13.2％であった。その中でも大部分は、製作過程での「気づき」であった。

活動のねらいⅲの、「製作から遊ぶ活動の過程を、各５領域のねらい（心情、意欲、態度）の観点から考えて記述し、子どもの育ちについて考える。」に関する５領域関連の記述はわずか４名であった。５領域との関連を考えるのに結構苦労していた学生が多かった。「一つの製作過程を体験することで、様々な面の発達をうながすことができる」との記述が９名いたものの、結果的に５領域との関連の重要性を実感するまでに至らなかった学生が多かったということである。保育の専門科目の履修をもっと積んでからのほうが、考える時期としてはよいのかもしれない。しかし、５領域の関連についての意識付けは必要であったと考えている。どの時期にどの活動で行うかは、今後の課題である。

この活動での「気づき」の視点は、ほとんど子どもの立場からであったが、「下調べの大切さ」や「普段から材料を集めておく」など、保育者としての「気づき」もあった。

この活動では、最終日に作品の展示を行った。作品には、〈作品のテーマ〉〈完成図〉〈材料〉〈作品を作るのに必要なもの〉〈子どもにとってどんな学びができるか・５領域との関連〉〈つくってみた感想〉を記入した用紙を添えた。友だちの作品から学ぶというねらいで、多くの学生の参考になった作品を、人気作品として発表した。各自が、参考になった四点の作品を選び、参考になった点も記録していったので、製作に関して様々な面で気づく機会になったと思う。

⑧ 遊びを伝える

ねらい ⅰ〈遊びのレシピ〉の実践。ⅱ模擬保

育で遊びの伝え方を学ぶ。

内容 ⅰ各自が考えてきた〈遊びのレシピ〉をグループで指導して遊ぶ。ⅱ子ども20名に指導することを想定し、各グループで遊びを選び、どのように子どもたちに伝えればよいかを話し合う。ⅲ学生を子どもに見立てて実践する。

考察 この活動は、前期最後の実践であり、時間をかけたので、回答数が最も多い177、14.9％であった。まず、各自の自主性にまかせて作成している〈遊びのレシピ〉の中の遊びをグループでお互いに紹介し合って遊んでみる。その中で、楽しかった遊びと代表者（司会の保育者）を選び、グループ全員でその選んだ遊びの伝え方を検討する。そして、クラス全員の前で、学生20名を子ども役として模擬保育を行うという活動である。グループ活動での学生たちは、子どもにかえったように楽しく遊んでいたが、模擬保育で、いざ伝えようとすると、どう言葉を発したらよいのか困っていた。友達同士で話している時のように言葉かけをするわけにはいかないことに気づいたようだ。保育者役、子ども役、あるいは参観者として、学生たちは様々な立場になって、遊びを伝える活動を展開して行った。わかりやすく簡潔に話すことから、保育者の表情にいたるまで、学生自身が実感したいろいろな「気づき」があった。

⑨ その他授業全体を通して

考察 この項目は、他の項目と重なるものもあったが、105の回答があった。授業全体を通して学んだ保育者に関する「気づき」が多かった。特に、子どもの目線で考え工夫することや、子どもの主体性を尊重することを挙げた学生が多くいた。また、保育者としての今後の課題に気づいた学生も多い。

(3) 学生３名の活動記録を時系列で追った調査

(1)(2)で、学生全体の記述について考察してきたが、本項では、３名の学生を対象に、それぞれの活動後の記録を時系列で整理し「気づき」の経過を追ってみた。

授業態度の真面目な学生の中から、それぞれに異なるタイプのＡ・Ｂ・Ｃの３名を選んだ。授業態度の真面目な学生を選んだのは、学生の授業に対する理解をできるだけ偏りの無い状態で把握するためである。また、タイプ別に選択したのは、学生によって授業内容の理解や捉え方は様々であろうと推測したからである。

ここでは、学生の学習経過を把握するために、活動内容を時系列に記載し、各学生の記述を整理していく。前期15回中何回目に実施したのかは［活動内容］に併記してある。なお、(ⅰ)(ⅱ)は、本稿(2)実践した活動での ねらい の項目にあたる記述である。各活動の最後の囲みには、前期最終日の試験答案の記述内容を記載してある。⑤サウンドスケッチと⑥「しゃがんでみつけた！」「みあげてごらん」は、戸外に出て併行して行ったので、まとめて記載してある。「絵本を見る」と「遊びを伝える」では、実践後に活動記録を書いていないので、囲みのみの記載となっている。文中の下線は、学生の「気づき」と思われる箇所である。囲み内の下線は、実践当時と同じ記述表現の箇所である。なお、記載の文は、学生の記述から抜粋したものである。

① 学生Ａの場合

［どのお顔？］授業２回目

「大学４年間がんばることをきめた」顔と「朝５時起きで通学にたくさん時間がかかってしんどい」顔を描いた。

・いろいろな顔の絵をみて、表情から相手の気持ちを読みとることができる。

［絵本を見る］授業３回目

・子どもの興味関心を引くような絵本をみつけ、自分のレパートリーを増やしていく。
・自然や動物などの名前や特徴は、絵本を通して知ることが多い。
・対象年齢を考慮して絵本を選ぶ。

［幼稚園で遊ぶ体験］授業４・５回目

(ⅱ)部屋の一角にある畳コーナーには、卓袱台や流し台、人形が寝ているベット、簡単な衣装の入った箪笥など、女の子が大好きなままごと遊びの道具がそろっていて、畳のまわりには棚があり、その空間は一つの家のようだった。ごっこ遊びをする子どもは本気で「なりきる」ので、この棚の外は、家の外という感覚で遊ぶのだろうと思った。(ⅲ)フラフープで遊んでいる時、授業で習った「か

もつれっしゃ」を大人数でやったら、とても盛り上がった。一つの道具もいろいろな使い方、遊び方があると思った。「はないちもんめ」は「〇〇ちゃんがほしい」などの掛け声があるので、名前を憶えることができる。驚いたのは、地域によって少しずつ異なることだった。みんなそれぞれ小さい頃にやっていたやり方に愛着があるので、譲れない思いがあり、「私はこうだった」と主張しあっていたのが、とてもおもしろかった。

（ⅳ）女の子はスカートやずきんなどの衣装が好きなようで、まるでお姫様になりきっているようだった。私達の小さい頃にはなかったものは、携帯電話である。子どもたちの、ピースをしてカメラ機能を使っている姿には驚いた。男の子は、すべり台を逆走していた。私もよく同じことをやっていたが、子どもは先生に怒られそうなことをやってみたくなるのだと思う。私達は（特に女子は）団体行動が好きだが、子どもは夢中になると友達の存在を忘れているかのように一人で真剣な顔をして取り組んでいるようだった。

・園児の写真が貼ってあったが、何かに熱中し真剣な目をしている子どもや、遊びに夢中になって楽しんでいる子どもなど、自然体で写っているものが多かった。
・ままごとコーナーには、机に湯のみ茶碗が２セット並んでいて、遊びに入りやすいように工夫してあった。

［サウンドスケッチ］　授業７回目
［しゃがんでみつけた！・みあげてごらん］

この大学はとても静かだといつも思っていた。だから、耳を澄まして歩くだけで沢山音が聞こえ、少し意識するだけで、自分のいる環境から得られるものが何倍も増えることに驚いた。花の色も言葉で表現できる範囲を超えて微妙な違いがあり、素敵だなぁと感じた。これからは、いろいろなものを子どもの目線で見てみたいと思う。そして発見する喜びを共有したいと思った。

・耳を澄ませると普段気がつかない小さな音が聞こえてくる。
・音のリズムを楽しむことができる。
・子どもの目線になってものを見ると、見落としていた発見がたくさんあった。保育者は常に子どもと同じ目の高さで、子どもや子どもを取り囲む環境をとらえていかなければならない。

［記録写真「竹の生長とともに」］授業８回目

子どもがたけのこを見つけるのは、地面につまずいた時だと聞いておどろいた。目よりも先に、足の感触によって、たけのこを発見するということだ。子どもは、実際に触れて体感することで、いろんなものを自分の中に吸収していくのだと思った。だから、保育において、「環境」がとても大事であるという意味が分かってきた。竹の筒で川を作るにしても、実際に筒を傾けてみて、斜めにすると水は速く流れるのだということを発見し、自分たちの遊びを自分たちの手で、より楽しいものにしていることが分かる。遊びやもの作りの中で自然と協力することを覚え、協同作業の中で思いやりや協調性が育っていく。子どもはよく頭を使って考えて実際にやってみて、いろいろなことを知っていく。子どもの伸びる力はすごいと思った。だから、先生がどの程度手を貸したり、あえて助言せずに見ていたり、その加減がとても難しいと思う。子どもが自分で「気づく」ことは大切にしなければならないが、どうしてもわからない時は考えてあげなければ前へ進めない。そのヒントを出すタイミングが難しく思った。

・竹の色や形や大きさについて試行錯誤しながら協力して作っていく過程が、完成時の達成感と満足感を生む。
・竹の実際の高さを掲示すると、子どもがその高さを感じられる。

［身近な材料の工夫］授業10・11・12回目

（ⅰ）簡単に作れると思っていたが意外と頭をつかった。まだ、おもちゃの対象年齢の判断はつかないが、パズルは難しすぎてもあきると思うので、6枚の絵は、色が似通らないように注意した。また、いろいろなジャンルのものを取り入れるため、キャラクター、乗り物、動物、野菜、果物、道具から一つずつ選ぶことにした。逆に、同じ仲間ばかり集めたパズルを作ったのもおもしろいと思った。（「6面パズル」を製作）

（ⅱ）ただ思いつきで作ったが、よくよく考えていくと、子どもの学びは多様にあると知って驚いた。

（ⅴ）［パックン牛乳でなんでも釣り・参考になった点］牛乳パックとゴムを使用して、触れると手

を「パックン」とかまれる。突然閉じるので、驚きと興奮が楽しめる。ボールを口へ向かって投げ、「パックン」と中に入ったら勝ちというゲームなどして遊べると思った。

［レジごっこ・参考になった点］空き箱と折り紙だけで、子どもの大好きなごっこ遊びが楽しめる点が良い。カードを切るところもついていて、本物のレジらしくしている。お店屋さんごっこに幅を広げられるので、とても良いと思った。お金も作れば、さらにお金のやりとりも楽しめる。私自身小さい頃はレジに興味を示していたので、子どもにとっては嬉しい作品だと思った。

・牛乳パックや紙コップなど、工夫次第で様々なおもちゃを作ることができる。
・子どもは、すき間に指を入れたり、紙をはがしたりするので、細部まで丁寧に張ることが必要である。

［遊びを伝える］授業 13・14 回目

・子どもが説明を集中して聞くことができるように、話は短く適切に行い、話す間は子どもを座らせる。
・遊びが始まった後も、繰り返し確認を入れて、ゲームに慣れさせていく。
・子どもは先生がやったことを、そのまま真似るので、モデルとなるように動く。
・話すとき、言葉使いに気をつける。

［その他授業全体を通して］授業 15 回目

・園児のいない幼稚園で子どもになりきって遊んだことがとても心に残った。子どもの頃、何が楽しくて、何が嫌いだったか思い起こしながら、また、子どもながらに先生のことをどう思っていたか、何を求めていたかなど、考えることができた。私は小さい頃、子ども扱いされるのが嫌だったので、実際子どもと関わる時は、一人の人間としてその子を理解しようと努力したいと思った。子どもに遊びを伝える授業は、学ぶことが多かった。トレーニングが必要だと思った。

②　学生 B の場合

［どのお顔？］授業２回目

「今日はいろんな人と話して共感を得ることができた」からしあわせ～な顔を描いた。子どもたちが、自分の気持ちを話し合うことは大切なことだと学んだ。線の引き方で、顔の表情が変わってくることも学んだ。

・笑った顔、困った顔、怒った顔など、子どもに「今日はどのお顔？」と聞いて、表情を答えてもらうことにより、子どもの心情をつかみとることができる。
・子ども同士の思いやりを育むことができる。

［絵本を見る］授業３回目

・ごっこ遊びにつなげることもできる。

［幼稚園で遊ぶ体験］授業４・５回目

（ⅰ）部屋にある子どもの机や椅子、洗面台、なにもかも小さいものだらけだったので、子どもたちの目線は大人よりもすごく低いものだと感じた。廊下に、子ども一人ひとりの何気ない表情の写真が飾ってあり、ロッカーの上に、小さな花が入った花瓶が目に入った。大きな積み木の角にはゴムが貼ってあり、子どもたちが安全に遊べる工夫がしてあることに気づいた。

（ⅱ）実際に遊んでみて、懐かしいという感じと楽しいという気持ちだった。住んでいた地域によって、遊びの歌や遊ぶものも違うと感じた。子どもたちは、遊びにいつも全力をつかっているから、保育者もスタミナや体力が大事だと思った。

（ⅲ）子どもの頃にした遊びを中心に遊んだ。

（ⅳ）ほとんどの子どもたちは、いろんな子と遊んでいた。一人でいる子もいたけれど、他の子どもたちが遊んでいるところへ積極的に参加しようとしている姿もあった。子どもたちは、何かしら道具を使って遊んでいたように思う。遊んでいる最中でも片付けの最中でも、子どもは先生の何気ない一言にも反応して行動していると感じた。

・子どもの気持ちになって遊んでみて、子どもには、遊びによって様々な発見や気づきができる。
・子どもが安全に遊べるように環境を工夫しなければならない。

［サウンドスケッチ］授業７回目

［しゃがんでみつけた！・みあげてごらん］

自分が思っていた以上に、身の周りには音がいっぱいあるということを感じた。花や草にはいろんな色があって、緑色でも植物の種類によって違うのだと思った。花や草や虫を見ていると、知ら

ない名前のものがたくさんあったので、名前を覚えていこうと思った。

・自分がいつも何気なく過ごしていた空間にも様々な音があり、音から周囲のものや状況を把握できるので、子どもにも気づかせてあげることが大切である。
・子どもの目線になることで、見えていなかった小さな植物や生物を観察でき、子どもが外の活動の中で、どのようなものに目がいくのか、また、どのようなものに興味をもつのかを発見できた。

［記録写真「竹の生長とともに」］授業８回目

自然や様々な環境を通じて、五感を鍛えることが大事だと思った。竹という一つの材料だけでも、数を数えたり、助け合って運んだり、自分の周りの物と比較したりと、たくさんのことを学べることに気づいた。また、竹を製作する作業のなかで、女の子と男の子では、表情や楽しみ方が違うことを初めて知った。子どもたちの何気ない表情や製作の経過や結果を写真によって生かすことも大事だと思った。

・一つの教材［竹］を使い、体験させることで、自然の豊かさやすばらしさを学べる。
・子どもの「次は～したい！」という主体性を尊重し、次の遊び（体験）へつないでいく。

［身近な材料の工夫］授業 10・11・12 回目

（ⅰ）どのようなものがいいのか考えるのに悩んだ。しかし、自分が幼い頃に遊んだものや母の助言からヒントを得られた。（紙コップで「スルスル GO!」を製作）
（ⅱ）一つの遊びで、子どもに様々な面での学びを提供できることが分かった。
（ⅲ）どの作品もそれぞれに工夫されていた。子どもたちの視点になって作ってあるもの、保育者が子どもたちに提供できるものがあった。作る楽しみだけでなく、作った後も使って楽しむ遊びがあり参考になった。
（ⅴ）［コロコロトリオ・参考になった点］ヨーグルトのカップと折り紙で簡単に作ることができ、前や後に動かせるので、転がし方を工夫できる。
［キラキラボトル・参考になった点］ペットボトルを上下にふることで、浮いているものが混ざってきれい。「どうしてこんな風になるんだろう？」と子どもの興味関心を引くことができる。
［ステンドバルーン・参考になった点］パラシュートのようにふわふわと落ちる感覚がよい。セロハンのような素材を使っているので、晴れた日に外でやると、光を通してきれい。パラシュートはどのように飛ぶのか、重さについての感覚をつかめる。

・同じ材料でも、工夫をすれば違う遊びが生まれる。
・製作の際には、子どもの安全に気を配る。
・普段から、身辺にある廃材を集めておく。

［遊びを伝える］授業 13・14 回目

・子どもに分かるように、説明しなければならないが、長い説明は子どもには理解しがたい。
・ゲームをしていて気づいたことを、〈遊びのレシピ〉にメモしておく。

［その他授業全体を通して］授業 15 回目

・自分が子どもの目線になって体験することで、幼少の頃に見ていた、あるいは感じていたものに気づくことができ、授業の活動に役立った。また、自分が見えていなかったものにも気づくことができ、人的、物的、空間的のすべての環境について考えることができた。

③　学生 C の場合

［どのお顔？］授業２回目

「楽しいけれど、風邪をひいて鼻声と喉が痛くて思いっきり笑えない」顔を描いた。表情は、自分らしさを自分なりに伝えるもの。そのやりとりで気持ちを伝え合う。保育者は、そこから、子どもの気持ちや心を理解しようと努める。

・いろいろな顔を見せた反応によって、表情や感情、あるいは興味関心の程度がわかる。
・いろいろな顔を見て、自分や友達との表情の共通点を探すことから、発見の面白さに気づく。

［絵本を見る］授業３回目

・友達と一緒に絵本を味わうことで、物語を共有し、共感することができる。
・夢中で絵本を読む子は、その世界観にひたり、想像をめぐらせている。
・絵本の色彩や美しさを感じることで、感性が豊かに広がる。

［幼稚園で遊ぶ体験］授業４・５回目

（ⅱ）一つひとつの遊具は、どれも子どもの数だけ遊びが生まれてくるようなシンプルなものだった。環境が五感に働きかけ、子どもに浸透していくようであったことに感嘆した。

おままごとの空間も子どもたちが、入り込みやすいように、子どもの体に合わせた大きさがより本物らしさを演出していて、見ているだけで楽しくなった。化粧道具なども、大人の女性になりきるために確かに欠かせないものだと、自分の子どもの頃を思い出した。

（ⅲ）人数制限のない「だるまさんころんだ」や、ブロックで「ドミノ」をして遊んだが、どれも意図的に始めたことではなく、思いつきだった。自然の流れの中にも、それぞれが経験によって得てきた「遊びを楽しむ」ための、無意識の工夫があったように感じる、その中でも一番のエッセンスは、みんなが思いっきり笑いあうことだったと思う。

（ⅳ）３歳の部屋だったので、人との関わりよりも、自分の遊びが主だった。走りまわりながら楽器を触りそのまま雲梯で遊ぶ子、もくもくとレールをつなぎながら汽車を走らせる子、どの子も遊びに夢中な様子が伝わってきた。また、すべり台をすべるときも、雲梯に登るときも、アイコンタクトで「見てて」とうったえているように感じた。声をかけられない分、表情で返事をしてしまった。そして、何よりも感心したのは、先生の動きだった。運梯を旨くできない子には、すかさず補助し「大丈夫できるよ」と声をかけながら支えていたり、ブロックを並べてみたり、おやつの前には、バラバラに遊んでいた子どもたちを集めながら次の活動の環境作りをしていた。是非見習いたい。

・一つの遊具をとっても、子どもによって多種多様な遊びがある。
・遊びに加わらなくても、眺めて楽しむ子もいた。
・子どもの発達程度に合わせて、援助をすべきかどうか見極めねばならない。

［サウンドスケッチ］　授業７回目

［しゃがんでみつけた！・みあげてごらん］

同じアリでも大きさが違えば移動の速さも距離も違うことや、鳥がただ鳴いているだけでなく、まるで会話しているようだということが面白く、そんな発見に立ち止まってひたることが出来る時間がもてて、とても充実した時間だったと感じた。

・普段の生活の中で気づかなかった音を発見・再発見することで、その面白さや不思議さに気づく。
・立ち止まって、対象に近づいて観察することで、新たな面を発見できる。

［記録写真「竹の生長とともに」］授業８回目

どの子もそれぞれに特徴があって、それが遊び方、表情にも良く出ている写真ばかりだった。そして、自分の考えだした遊びを体じゅうで感じて、自分の世界や友達と共に味わっている姿が本当に楽しそうに伝わってきて、私も一緒に遊びたい気持ちが沸いてきた。特に、スクールバス運転手さんへの子どもたちのまなざしが印象的に感じた。手や体の動き、また言葉からも、何かを感じとろうという強い意欲がよくわかり、先生たちが、いかに子どもたちに愛情を持って環境作りをし、子どもたちを「見ている」のかを感じた。

・竹そのものを眺め、触れて味わうことで、自然に関心を持ち観察力が身につく。
・保育者が最小限の援助をすることで、子どもの自発性、主体性が尊重され、より大きな達成感が得られる。
・「竹」を作る製作過程をそれぞれに工夫し楽しむことで作品に対する愛着が生まれる。
・協同作業を通して、共有、共感、連帯感が生まれる。
・役割分担をすることで友人との絆が深まる。

［身近な材料の工夫］授業10・11・12回目

（ⅰ）イメージが定まってからは、集中して作ることができ、アレンジの発想も友達のアイディアを借りながら次つぎに生まれて楽しかった。友人が「人形遊びやおままごとが好きな子が喜びそうだね」と言ってくれたことに嬉しさや発見、楽しさ、喜び、とたくさんのものを得たと思う。（空き箱の「おうちと庭」を製作）

（ⅴ）［パクパクカバさん・参考になった点］ものが牛乳パックであることも、カバであることもすぐ分かるので、一瞬で興味を引く。しっぽを引っ張ることで口が動くので「見る」ことも「遊ぶ」ことも楽しめる。

［パクパクくん・参考になった点］ティッシュの箱を半分にするだけで、遊びが生まれるという「簡

単さ」が幼児でも分かりやすいと思った。また、応用のできる形なので、この他にも「パクパク」するものに興味をもって子どもが模倣しやすいと感じた。

・材料を、見る、触れる、切る、そしてのりをつけるなどで、その材料がどのようなものか認識される。
・物の貸し借りを通して、人と接する時のマナーの大切さを知る。
・失敗をしても、旨くできても、それが一つの経験として蓄積される。

［遊びを伝える］授業 13・14 回目

・年齢によって、楽しむことのできる遊びの程度が異なる。
・保育者が遊びをきちんと認識せずに説明につまり長びけば、子どもの注意力は続かない。
・声かけによって子どもは遊びに入り込みやすくなる。

［その他授業全体を通して］授業 15 回目

・子どもによって感じ方考え方は異なる。ゆえに、遊びや人間関係への関わり方もそれぞれ異なってくる。
・保育者がいかに環境の設定をするかによって、子どもの興味・関心がうまれる機会も左右される。
・保育者の感性のあり方、視点の持ち方が子どもに影響する。

(4) 3 名の学生の「気づき」に関する考察

前項（3）で、3 名の学生の「気づき」に関する経過を追ってみたが、学びはじめの 1 年生だけに、実践の活動を体験するたび、新たな「気づき」をしていることが分かる。タイプの異なる 3 名の学生は、予想通り、それぞれの表現に特徴がみられた。

学生 A は、文面から優しい人柄がうかがえる。活動のねらいに沿って素直に真面目に参加し、丁寧な記録をしている。しかし、授業 7 回目の活動以外は、体験の実感が最終日の記述にあまり表現されていないのである。学生 A は、自分の子どもの頃のことを思い出しながら子ども理解をし、自分自身の気持を重ねて保育者としての姿勢を考えている。つまり、活動中は、自分自身の経験や気持ちを中心に理解する傾向があり、活動のねらいを的確に把握して認識しているとはいえないことが特徴であると考えられる。

その点学生 B は、的確に活動のねらいを把握し認識している。客観的な態度で、保育環境の細部にまで気を配っていることが活動記録からうかがえる。「感じた」という表現が多く、その表現の内容からも、感性の豊かな学生であると思われる。常に、子どもと保育者とのかかわりに注目しており、保育者としての学びを意識した積極的な姿勢が感じられる。

学生 C も、学生 B 同様に活動のねらいに関しては的確に把握している。常に周囲とのやりとりを感じて、受け入れようとしている姿勢がうかがえる。活動記録には、「感じた」「伝わってきた」など臨場感のある表現が見受けられる。様々な事象に感動する感情表現の豊かな学生である。保育者に対しても、共感や憧れをもち、見習いたいなど、自分のこととして意識し学びを深めているようである。

それぞれに三者三様ではあるが、3 人とも、自分の幼少の頃と重ね合わせて学習していることがわかる。とらえかたとも関連して、記述の表現も三者三様であった。9 項目中気づきのポイントとなる言葉で、3 人に共通していた言葉は、「環境・表情・興味関心・感じる・発見・楽しむ・工夫・遊び・竹」の 9 語しかなかった。この 9 語のなかで、環境のかかわりをとらえる視点としてのキーワード「出会う」「感じる」「気づく」「発見する」「好奇心をもつ」「探究する」「表現する」と照合してみると、[感じる]「発見」の 2 語があったが、興味関心は「好奇心をもつ」と同意と考えられる。本稿のテーマでもある「気づく」については、学生 B と学生 C は使っているが、学生 A の記述には使われていなかった。「出会う」と「探究する」については、表現されていないので、キーワードに対する認識は、後期の課題として考えている。また、授業では子どもの目線に立って子どもと共感できる保育者を目指し、「子どもの目線」で見ることをねらいとした活動を実践しているが、学生 C の表現には「子どもの目線」という表現はみられなかった。しかし学生 C には、保育者の立場で子どもの気持を理解しようとしている姿勢

が、感じられる。「共感」については、学生Ｂと学生Ｃにはみられるが、学生Ａには共有という表現で出てきた。

数多い記述中に共通の表現がわずかしかないことを考えると、学生のとらえかたや表現が、いかに多様であるかがわかる。多様な価値観や能力の学生が、多様な学びかたをして、やがて、保育観が形成されていくことを考えると、保育者養成にかかわる教員として、教育内容の意図をしっかりと伝達する責任を痛感する。また同様に、問題解決能力の育成にも影響を与えると考えている。

多様な学生の学習効果を図るには、授業内容のねらいを明確に示すことと個々の学生の学びを丁寧に確認していくことが重要であると考える。

7. おわりに

本稿では、学生の「気づき」の学習を調査し考察してきた。保育を学び始めたばかりの学生は、実践活動の体験で感じた「気づき」と、講義等から新たに学んだ知識による「気づき」の二つの「気づき」を学習していることが分かった。前述のとおり習熟した保育者は、自分自身の子どもの見方やとらえかたに気づき、創造的に自己を改革していくことができる。学生たちは、これから創造的な保育者を目指し自分の保育観を形成していかなければならない。そのためには、幅広い知識と体験を蓄積する中で、自分の気持や認識の変化を意識して「気づき」を深めていくことが重要である。

そこで、教員は、学生が「気づき」を深め、子どもの目線で保育環境を捉え、楽しい活動を考え工夫する学習ができるように、本稿で挙げた課題を整理し、今後の学びにつなげていかなければならない。すなわち、

① 環境とのかかわりをとらえる視点であるキーワードに対する認識を深める。
② 学生が、自分なりに考えて工夫できる余裕のある、時間配分の授業を工夫する。
③ ５領域と関連させながら、幼児の活動が総合的であることを学び、子ども理解を深める。
④ 学生同士の学びあいを重視し、保育者としての豊かさと協働の精神も学んでいく。
⑤ 多様な学生の学習効果を図るために、授業内容のねらいを明確に示し、個々の学生の学びを丁寧に確認して指導していく。

以上の５点を後期授業の課題とし、何をどのように学ぶかということを検討したい。

授業での講義や実践に加え、実習やボランティアなどの体験学習も学生の学びに大きな位置をしめる。この点で、幼稚園での体験プログラムは有効であった。今後は、保育者養成の観点から、学科全体の課題としてダイナミックなプランを考えていくべきであろう。

＜注＞

1 吉田若葉　2003「創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫－科目「子どもとことば」での試み（報告１）－」『北陸学院短期大学紀要 35 号』93
2 文部科学省第 26 号『幼稚園教育要領』
3 文部科学省第 26 号『幼稚園教育要領』・厚生労働省第 141 号『保育所保育指針』
4 無籐隆監修 2007『事例で学ぶ保育内容　領域環境』萌文書林
5 福元真由美 2007「本書まえがき」『事例で学ぶ保育内容　領域環境』萌文書林 3
6 福元真由美 2007「本書まえがき」『事例で学ぶ保育内容　領域環境』萌文書林 4
7 吉田若葉 2003「創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫－科目「子どもとことば」での試み（報告１）－」『北陸学院短期大学紀要 35 号』94
8 新村出編 2008『広辞苑第六版』岩波書店 688
9 柴田武 山田進編 2003『類語大辞典』講談社 261-262
10 スティーブン・R・コヴィー著フランクリン・コヴィー・ジャパン訳 2005『第８の習慣』キングベアー出版 76
11 スティーブン・R・コヴィー著フランクリン・コヴィー・ジャパン訳 2005『第８の習慣』キングベアー出版 76-77
12･13 スティーブン・R・コヴィー著フランクリン・コヴィー・ジャパン訳 2005『第８の習慣』キングベアー出版 79
14 森真理「文化ってなんだろう」2007 小田豊・森真理編著『子どもの発達と文化のかかわり』光生館 103
15 津守真 2006『保育者の地平』ミネルヴァ書房 19-20
16 岩田純一 2005『子どもはどのようにして〈じぶん〉を発見するのか』フレーベル館 152
17 津守真 2006『保育者の地平』ミネルヴァ書房 51
18 津守真 2006『保育者の地平』ミネルヴァ書房 183
19 津守真 2006『保育者の地平』ミネルヴァ書房 287
20 津守真 2006 保育者の地平』ミネルヴァ書房 286-287
21 汐見稔幸 1998『その子らしさを生かす・育てる保育』

IUP 220

[22] 神長美津子「幼稚園教育要領にみる子どもの特性を生かした保育を考える」2007 小田豊・森真理編著『子どもの発達と文化のかかわり』光生館 136

[23] 高濱裕子 2001『保育者としての成長プロセス』風間書房 245-246

[24] 津守真 2006『保育者の地平』214

[25] 三谷大紀「保育の場における保育者の育ち 2007 佐伯胖編『共感』ミネルヴァ書房 135-136

[26] 宇田川久美子「「共に」の世界を生み出す共感」2007 佐伯胖編『共感』ミネルヴァ書房 83

[27] 汐見稔幸 1998『その子らしさを生かす・育てる保育』IUP 226-227

[28] 津守真 2006『保育者の地平』ミネルヴァ書房 291

[29] 三谷大紀「保育の場における保育者の育ち」2007 佐伯胖編『共感』ミネルヴァ書房 110

[30] 本吉圓子 2003『子どもの育ちと保育者のかかわり』萌文書林 273

[31] 三谷大紀「保育の場における保育者の育ち 2007 佐伯胖編『共感』ミネルヴァ書房 151

[32] 高濱裕子 2001『保育者としての成長プロセス』風間書房 242

[33] 高濱裕子 2001『保育者としての成長プロセス』風間書房 242-243

[34] 高濱裕子 2001『保育者としての成長プロセス』風間書房 256

＜参考文献＞

1）E. B ゼックミスタ /J. E ジョンソン 1996『クリティカルシンキング』北大路書房

2）クレイグ・ブロード / ナンシー・ラム 1993『クリエイティブ・チャイルド』ビジネス社

3）津守真ほか 1999『人間現象としての保育研究増補版』光生館